「犬の夜」

作　山田めい

［登場人物］

日井そそ子……管理局の非常勤職員
佐々岡まり……管理局の職員
山本宗治……面接を受ける男

棚田太郎……元活動家家の男
金子　愛……棚田の宿泊先の家主

内田宏美……山本の恋人。

［あらすじ］

管理局で働く日井と佐々岡部長の仕事は、この国で働きたいと望む人たちの話を聞くことだった。その傍、二人は「犬」たちの話も聞くということにも専念していた。「話をきく」管理局の思いとは裏腹に、世間では、管理局で行われていることを知る人々が抱く薄らな不満が渦巻いていた。そしてその不満は、最下部で働いている日井にも向けられていく。夜の中で迷っている人たちの物語。

【0】かの夜

暗い。

それは、部屋の電気が切れたのではなく、
夜だからかもしれなかった。
夜から朝にかけてのちょうど真ん中の時間帯。
この国の人口の約5割は眠りについていて、
家の中、あるいは家の外で、
布団やあるいは布団の代わりになるものにくるまって、
ジッとしている。
4割の人たちは目を覚ましていて、
仕事をしたり、家事をしたり、
考え事をしていたり、何もしていなかったりする。
残りの1割の人たちは迷っている。
もう眠ってしまいたいと思っているのだが、
まだ眠ってはいけないような気が胸にあり、
いつまでも迷っている。

【1】管理局　面接を受ける男

求職所の面談室のような部屋。ここは、管理局の中にある部屋の一つ。

壁は白いが、何度か落書きが塗りつぶされた様に思える。
また、壁には書類やポスターが掲示してある。
しかしそれらに記載されている文字は、薄らぼんやりしていて、
日本語のようで日本語に見えず、
日本語の読み方をすることができない。
面談室を通り過ぎたところには、男性用の便所があるのか、
青色の人型ピクトと赤色の矢印が掲示してある。
青色の人型ピクトは、左足を誰かに引きちぎられており、
片足で立っている。
古かったものを塗り固めて作られているこの部屋は、
作られてからの年月が多いのか、
それとも少ないのか一見判断ができない。

車椅子に座った女性職員（佐々岡）がデスクに向かい、
男（山本）の話を聞いている。
テーブルの上にはパソコンとプリンターが設置されている。
男（山本）は手に一枚の書類を手にして、女性職員（佐々岡）と
話をしている。

山本　（書類を手にして）ここで働かせてください。
佐々岡　……
山本　（書類を手にしながら）ここで働かせてください。

佐々岡　……
山本　（書類を手にしながら）ここで働きたいんです！
佐々岡　……
山本　（書類の内容を読み上げる）週休２日、年間休暇１１０日以上、交通費全面支給、朝７時～１６時まで、雇用、労災、健康、厚生、退職金制度あり……年齢制限４０歳、僕、今年で３７歳ですからセーフ。給与１４万４千円から……正社員登用あり……いいですねえ、僕の条件にぴったりなんですよ。体力に自信のある方優遇。僕、今はこんな感じですけどね。俳優もやってるんで、体力には自信があります。（優しい話し方）ぶたいはいゆう。体力には自信あるんですよ。あ、もしかして僕のこと知ってます？
佐々岡　……
山本　（笑って）ああ、いいんです、広島の安佐南区のなんていうんですかね、小劇場でやってるので、テレビにでるとか、なんか、そういうところではやってないんですよ。まあ、俳優やりつつ、ぼく、もともと介護の現場で働いてて、介護福祉士の資格も持ってるんで、安佐南区でずっと、そういう、介護とか、そういう感じで働きながら、俳優もやってて……で、まあ、この度、事情はあるんですけど、広島の安佐南区から離れて、働きたいなって、そういう、
佐々岡　……
山本　……（手にしている書類を大事に見て）この職場を紹介していただきたいなって。
佐々岡　……
山本　（佐々岡へ）で……紹介状。
佐々岡　……
山本　……紹介状。書いていただけます？
佐々岡　……
山本　（大きな声でゆっくりと話す）紹介……
佐々岡　（かぶせて）無理。
山本　……え？いま何……
佐々岡　（かぶせて）無理。
山本　え。
佐々岡　だから、無理。
山本　え、無理って言ってます？
佐々岡　うん。
山本　え、え、え、無理なんですか？どうして！
佐々岡　うーん。ちょっと難しいかな。
山本　そんな、紹介状書いてもらうだけでいいんです。
佐々岡　（かぶせて）私はさ、ここの職員やって長いんだけど、
山本　はい。
佐々岡　明らかに無理なところには紹介は出来ないわけね。
山本　（佐々岡の言葉が聞き取れない）え？なんです？
佐々岡　だから、無理、紹介は無理。
山本　む、無理……そんな……納得できません！

佐々岡　（山本の言葉が聞き取れない）え？
山本　だから（引き笑いをしている）……そんな軽く無理だなんて言われても僕は納得できないって言ってるんですよ。ここを紹介してください！

山本、持っていた求職票の一部をちぎって、佐々岡に手渡す。

佐々岡　大体さあ。
山本　え、
佐々岡　大体さあ、なんで就職したいわけ？
山本　それは……あなたもこういう仕事をしてるんだから分かるでしょ？今の僕の給料は、手取りで、月9万3千円ですよ？自分の能力とか、技術とか、活かしながら、今よりもいい給料で働きたいって思うのは当然でしょ？ほらほら、さっさと手元のパソコンから、紹介状を打ち出して、僕に渡してくれればいいんですよ！
佐々岡　（山本の言葉が聞き取れない）え？
山本　え。
佐々岡　ちょっと、もお、あなたさあ、何言ってんのか、全然分からないんですけど。
山本　え。
佐々岡　あんた、滑舌が悪い。

山本が言っていることが聞き取りづらく、機嫌が悪くなる佐々岡。

山本　え。か、滑舌が悪い？僕の滑舌が悪いっていうんですか？
佐々岡　滑舌が悪くて何言ってんのか、聞き取りづらいのよね。
山本　ちょっと！
佐々岡　本当に俳優だったわけ？
山本　そんな、失礼でしょ！僕はね、広島の演劇界ではちょっとしたものだったんですよ？僕の滑舌が悪いというなら、他の役者はどうです？言葉を喋っていないのも同然ですよ！まあ……俳優は一旦やめて、これからは、広島を離れて、働きたいなって思ってて……

山本、話しながら肋骨の辺りが痛むのか、じっと抑えている。

佐々岡　具合悪いの？
山本　気にしないで、持病の肋間神経痛ですから……。
佐々岡　そおねえ……

佐々岡、髪の毛をイジって、退屈そう。

山本　パソコンを動かすのが面倒くさいだけなんじゃないですか？
佐々岡　……

山本　仕事を紹介していただけない理由をはっきり、具体的に教えていただかなくては、無職の３７歳を納得させることはできませんよ！
佐々岡　……犬は飼ってないんですか？
山本　は。
佐々岡　犬。
山本　え、なんて言いました？本当に聞き取れないんです……
佐々岡　この施設で犬飼ってるんです。
山本　……え？
佐々岡　細い犬。
山本　細い、い（聞き取れない）？
佐々岡　細い犬。
山本　細い、い（聞き取れない）？それが理由ですか？
佐々岡　（おかしくなって大笑いを始める）ひっひっひ……
山本　……（突然奥に向かって叫ぶ）おーい、ちょっとー！誰かきてもらえるー？誰かー！誰かー！別の人来てください！！
佐々岡　（笑っている）ひっひっひ……

佐々岡は舞台奥に向かって叫び続けている。
すると奥から別の女性職員（日井）がやってくる。

日井　……はい。
佐々岡　（日井へ）ちょっとさあ、この人滑舌悪くて何言ってるのか全然分からなくって。
山本　ちょっと、僕の滑舌が悪いってなんですか？僕からすればあなたの方が滑舌が悪いですよ！
佐々岡　（山本が何を言っているのか聞き取りづらい）え？なんつった？
山本　もう！（日井へ）すみません、ちょっとあなた。
日井　あ、はい。
山本　（書類を日井へ差し出して）お願いします。僕、ここで働きたいんです。紹介状を打ち出していただけませんか？
日井　え？
山本　あなた以外に誰がいるんです？この人（佐々岡）は全然、話聞いてくれなくて……僕の滑舌が悪いからって話が聞こえないふりをしてはぐらかされるんです…お願いします。紹介状が欲しいんです。さあ！このパソコンを操作して打ち出して！

山本は机上のパソコンを日井に向ける。
日井は山本の言っていることや、
やって欲しいことをゆっくりと理解する。

日井　あ……紹介状？
山本　そうです！
日井　あー、ちょっと……できませんね。
山本　え？

日井　ちょっと難しいですね。
山本　どうして？ちゃんと説明してくださいよ！

山本、興奮して咳き込んだ咳が止まらない。
日井は山本の言っていることをゆっくり理解している。

山本　すみません、持病の肋間神経痛と百日ぜきが……
日井　あのうー、私……、
山本　は？
日井　私……
山本　はい、なんですか。
日井　……パソコンが操作できなくて、
山本　ん？あ、はい。
日井　……はい。
山本　……じゃあ、他の職員さん呼んで来てください。
日井　……え、
山本　パソコンができて、話が通じる人をここに連れて来てください。
日井　すみません、私……できません……
山本　電話かけて。
日井　できません。
山本　どうして？
日井　ボタンの押し方がわからなくて……
山本　……できない、できない、ってじゃあ、何ができるんです、あなたに。
日井　え。

答えられずに困る日井。

山本　（笑って）は。どうして、僕が無職なんです。
日井　犬の世話です。
山本　は？
日井　私はここで、犬のお世話をしているんです。今いる犬は12匹。
山本　ああそう。世話って言っても、ご飯やって、散歩させるだけでしょ？
日井　いいえ、話を聞いてやるんです。
山本　なんです？
日井　どの犬も、弱っているんです。細くなって……だから、私は、話を聞いているんです。どの犬の話もしっかりと聞いてやるんです。12匹の犬には、みんなそれぞれの事情があるんです。
山本　……あなたここの職員なんですよね？そんなこと、どこがあなたの仕事なんです。
日井　……。
山本　ははは、どこの社会がそんなことを許すんです？
日井　（佐々岡へ）いいですよね？部長。

佐々岡　そうよ。
山本　え？部長？あなたが部長？
佐々岡　そうに決まってるでしょ？まー、とにかくあなたにはその職業は無理だわ。紹介できません。
日井　部長もそう言ってるんで、また別の就職先を見つけてきてください。
山本　そんな！僕に何が足りないって言うんです？
佐々岡　（日井へ）この人何言ってんの？
日井　自分に足りないところがあるなら教えてくれって。
佐々岡　何それ。
山本　……

山本、佐々岡の座っている車椅子をくるりと後ろ向きにする。
自分で振り返ることのできない佐々岡。
山本は日井のことも、手を振りかざして脅す。

日井　あ……！

その場を動くことができない日井。

佐々岡　ちょっと！何するの。
山本　ほら！あなたは自分でこちらを向くことさえできない！
佐々岡　やめてよー。
山本　（日井と佐々岡へ）あなたも、あなたも、一体何ができるっていうんです？
山本　……僕に何が足りないのか、はっきりと、教えていただきたいんです。
日井　……。
山本　僕は、大学は4年と2年で合わせて6年も通いましたし。国立大学ですよ。俳優をしていましたから、人前で喋ることも得意です。それに、ブランクは少しありますが、介護福祉士の資格もある。簿記3級、漢検準二級、英検2級、パソコン検定2級持っています。鬱になったこともないし、身体も丈夫です。50mは7秒で走れるし、おばあちゃんは30分あればお風呂に入れることができます。体力には自信があるんです。後ろにおじいちゃんを背負っても……こうやって、こう……

山本、咳は止まったが、具合が悪いのか、ぐったりとしている。

山本　すみません、ちょっと……お水いただけます？（横になる）
日井　（適当な相槌）はい。
山本　……お水いただけます？
佐々岡　何言ってるの？この人。
日井　えっと……
山本　（弱っているが大きな声で）お水ください！

佐々岡　（山本が必死なのがおかしい）ひっひっひ……
日井　（佐々岡へ）紹介状を出してあげればいいじゃないですか。
山本　紹介状はもういいんで、お水ください！

山本、日井の腕を掴んで、水をせがむ。

日井　しっかりと手続きを踏まないと、
山本　すみません、水が欲しいんです！
日井　出してください、と言われてですね、すぐ出せるものじゃないんです。
山本　水！
日井　あんまり騒ぐと出すものも出せませんよ。
山本　水が欲しいんです……
日井　紹介状はすぐには出せません。

次の言葉が続かない山本。

佐々岡　……言葉がねえ……
日井　紹介状はすぐには出せません。私たちにできるのは犬の話を聞いてやることくらいです。
山本　犬の話なんか聞くことに一体なんの意味があるんです！

日井、山本の背中を優しくさする。

日井　大丈夫。
山本　（力なく）ええ？
日井　今、私は１２匹の犬の話を聞いていますが、あなたの話もちゃんと聞きますよ。
山本　……
日井　さあ、話してくださいよ。なんでも、聞きます。

山本、すぐには言葉が出てこない。

佐々岡の車椅子は背を向けたまま、彼女の手の動きだけが、部屋の壁に写し出される。

佐々岡　（二人に背を向けたまま話す）人は死ぬ。
日井　え？
佐々岡　人はいつか死ぬ。犬もいつか死ぬ。
日井　そうですね。生き物は必ず死にます。
佐々岡　ああ……目の前に、まぶたの裏側にウワワと浮かぶのよ、私と話し、怒ったり、笑いあったり、ああ、亡くなったあなたの顔が浮かぶ……
日井　はい。
佐々岡　世の中、いろんな人がおるからねえ。何もしていないと、意味がないと、恐ろしくて仕方ない人もいるだろうけど、私は……私たちは、今、あなたの話を聞いていることが、あなたも私

も、生きているってことだから。そう思うのよね。

日井　……

佐々岡　まあ、そんなに泣かないで。

静かな時間。

山本　すみません……あの。

佐々岡　……。

山本　僕のこと、見えますか

佐々岡　……。

日井　……。

山本　あの、僕のこと、まだ見えてますか……。

暗転。

生きている時間が過ぎていく音が聞こえる。

やがてその音も聞こえなくなる。

【1・5】壁越しに話を聞いている日井

管理局の白い壁に耳をあてている日井。

壁の向こうからは、佐々岡と誰かが話している声がかすかに聞こえる。

日井　管理局では、佐々岡部長と私は、毎日毎日細い犬たちの話を聞くことが仕事でした。犬たちは皆、身体のどこかを痛めていて、話の途中で時折クウクウと涙を流したり、その身を小さく折りたたんでジッと動かなくなることもありました。細い犬たちは皆一様に、いまを捨てて、何か新しい職業につこうとしていましたが、部長と犬たちが話すのを、管理局のリノリウムくさい事務室で聞きながら、ああ、それはむずかしい、と思っていました。なぜなら、仕事するには、どの犬もあまりにも弱く、言葉が難しかったからです。

壁の向こうからは佐々岡の笑っている声が聞こえる。

壁の向こうから、男の声が聞こえる。

男の声：すみませーん！誰か、他におられませんかー？誰かー？

先ほどよりも、大きく佐々岡の笑い声が聞こえる。

日井は壁に耳をつけたまま動かない。

そのままどこまでも夜が更けていく。

暗転。

【2】金子の部屋

金子の自宅、深夜一時十七分。

金子は、目と鼻をクシュクシュとさせながら、ベッドに横になり、YouTubeを携帯電話で視聴しながら、隣の部屋とつながる壁に左耳を当てている。
小さな携帯電話の画面に何が写っているのかは分からないが、若者たちのしきりに叫んでいる声が聞こえる。
棚田は、ニンテンドーswitchで、スーパーマリオが動くためのコースを作っている。

金子　絶対になんか飼ってる。
棚田　（ゲームに集中している）
金子　ぶえっくしゅ。
棚田　きたなっ
金子　窓閉める。
棚田　そしたら熱中症で死ぬ。
金子　でも窓開けてる時だけだもん、絶対隣の部屋、飼ってる。
棚田　（生返事）うーん。
金子　犬か、猫、毛がある系。
棚田　おう。
金子　どっちだと思う？
棚田　魚。
金子　ショーコを掴む。そして、大家に即テル。決まり。

金子は壁に耳を当ててジッとしているが、しばらくして

金子　帰る。
棚田　え、
金子　じゃあ、
棚田　あ、そう？そうなの？なんで。
金子　そろそろ。
棚田　吉野家？
金子　電話のバイト。
棚田　そう。

金子は外に出かけるために、歯ブラシを口に突っ込み始める。

棚田　行くべきじゃないね。
金子　ん？
棚田　行かない方がいいんじゃない？
金子　は、じゃああんたが払ってくれるわけ？
棚田　何を
金子　ジキュウ。私が、これから3時間働いて、六千円もらって、この部屋の、電気代を払うんですけど、それを、あなたが、払ってくれるんです、か？
棚田　それはさー、今だけじゃん。
棚田　そんな、目の前の3時間と明日の電気のことだけ考えたら、まあ、今お前は、今すぐ歯あ磨いて、着替えて、タクシー乗って、

電話台についた方がいいけどさ。もっとデカイスパンで考えたら、お前の未来の生活を考えたらね、このままバイトに行かずに、俺と寝てる方がいいと思うのな。

金子　マリオしてますけど。

棚田　それは今の話でしょ？遠い目で見てごらんよ。俺と過ごしている時間があって、その向こうにあるお前の未来はどうかね、目の前の六千円よりもはるかに大きいものだと思わんかね。どうせ大した仕事でもあるめえ。

棚田、ニンテンドーswitchをベッドの上に投げ出す。

金子　は？

棚田　お前が今日働かなくたって、世の中回るだろ？

金子　回りません。

棚田　電話出て話して、切るだけ。

金子　いります。

棚田　管理局の夜の電話なんて、

金子　いるの、いるのいるのいるの。

棚田　隣に住んでるおねえちゃんをご覧よ、あんなにパットしない見た目なのに、管理局の日勤やってんだよ？

金子　え。

棚田　俺は、お前の方が頑張ってると思うけどね。

金子　なにそれ？マジ？　大体なんであんた知ってんの？

棚田　多分ね。

金子　ストーカー？

棚田　管理局の門で毎朝見かけてた。

金子　あ……。

棚田　うん。

金子　そっか。（クシャミをする）グシュ。

棚田　大丈夫？

金子　なんかごめん。

棚田　うん、まあ。

金子は歯を磨きながら、部屋の中に吊るされた洗濯物の中からパンツを探している。

金子　（歌っている）洗濯物は～こんな～に　たくさん～あるの～にな

棚田は、黙ってニンテンドーswitchを動かしている。

金子　（歌っている）ない～　な～い

洗濯物の中から履きたいパンツが見つからない金子は、諦めて先にスウェットから外出用のスカートへ履き替える。口の中に溜まった液を吐き出すために、洗面台へ向かう。

金子　（声）ほら一五分が目標だよ。
棚田　おう、頑張れ。
金子　（声）ちがう、オメーも出るんだよ。
棚田　いいよ、俺明日昼まで出ないから。
金子　（声）いやだから。
棚田　洗剤くらい詰め替えとくし。
金子　（声）二十分になったら出てっくださ〜い。
棚田　トイレの芯も捨てとくし。
金子　（声）switch持っていかないでね。
棚田　……。
金子　あと、セーブ消しといて。

金子、電源が落ちているラップトップPCを開き、暗い画面に自分の顔を写し、中腰で眉毛を書き始める。

棚田　……機嫌悪いの？
金子　（集中している）……
棚田　……（急な大声）あ！
金子　ちょっと、
棚田　……死んだ。
金子　アッソ。
棚田　……お前もマリオから多くを学ぶべきだ。
金子　はいはい。

棚田、寝転がり、金子のスカートの中をダラダラと眺めながら話している。

棚田　マリオとお前はよく似ているよ。目の前の少しのピンチにばかり気が取られて、時間だけがイタズラに過ぎていく。事あるごとにカメにさらわれる女が「助けて助けて」と騒ぐせいで、その度に、人生のほとんどを、よくわからない旅に奪われている……。それが、どうだ、そんなことばかりしていて、奴はもう四十手前だ。身体を動かしてばかりいて、人と話すような事はほとんどないせいで、奴の語彙力はほとんどない。……勿体無いね……。
金子　五分後に出れるの？
棚田　なんで何も履いてないの？
金子　パンツない。どっかで見た？
棚田　干してある。
金子　生理用しかない。
棚田　知らない。
金子　まあ、いいか。
棚田　ねえ？

棚田、金子の両足首を掴んでいる。

棚田　行かない方がいいんじゃない？
金子　だから……
棚田　……お前には貧しくあって欲しくない。
金子　貧しくならないために、働きに行くんですけど？
棚田　……人の下で働けば働くほどお前は人の下に入り込んで行くんだよ。
金子　……ブシ（クシャミ）。
棚田　……わかるだろ？あるよ、上も下も。
金子　……眠たいの？
棚田　この国にはさあ……だから、牛丼を頼まれて売るんじゃなくて、
金子　吉野家じゃなくて電話のバイト。

金子、ベッドに横たわる。

金子　……ごめん、窓閉めて、ちょい苦しい。
棚田　いちいち大げさ。
金子　絶対犬飼ってる。隣。
棚田　……欲しいものもねえのに、働くってことは、

突然の暗闇。
視界が奪われる。

電気代の支払いが間に合わなかったらしく、金子の部屋は停電したのだ。
ベッドに投げ出されたニンテンドーswitch の液晶画面だけが部屋を照らしている。

金子　あ。
金子　うそ、もうダメなの？
金子　もー……
金子　……ねえ、携帯取って。
金子　ねえ……あれ、ねえ、棚田？……棚田？……わ！

金子は、薄暗闇で棚田に掴まれた。

金子　ちょっと、何すんの。
棚田　……俺はさ、
金子　窓閉めて。
棚田　……貧しくあって欲しくないんだよ、この国の人、みんなに。
金子　……。
棚田　……。
金子　黙っていることは悪いことじゃない、
棚田　……。
金子　と、私は思う……、

棚田　……。

金子　まあ、ように、あんたみたいな人は黙ることも覚えるべきよ。

棚田　……今は、黙ってる。

金子　いい加減、いつも通りになりなよ。

棚田　……。

金子　黙ってないでさ。

棚田　……。

金子　もう……。

棚田　……1万貸して。

金子　え？

棚田　1万だけ、貸してくれない？

♪音楽

ややあって暗転。

【2・5】管理局の門前

若者たちが集まる管理局の門前。

白い壁がそびえ立っている。

拡声器を片手に、棚田は訴えを叫んでいる。

棚田　みなさんが、管理局の不当な人権弾圧によって、ひどい目にあっていることが、だんだん知られてくるようになっています。管理局、ふざけんなよ。お前らがやってんのは、虐待だからな。人を殺そうとしているからな。いいかげん気付けよ。仕事だからって、なんでもやっていいわけじゃねえぞ。お前らがやってんのは虐待なんだよ。（コールが始まる）人権守れ、人権守れ、人権守れ……

コールが続く風景と、夜、管理局の電話番へ出勤する金子が重なる。

金子　毎晩管理局へ働きに出かけていたときに、彼をよく見ていました。一二日間に及ぶ、管理局前での集会、演説、先頭に立って訴える彼と、そしてその周りには彼に似た男女が数十人集まって、いつもコールしていました。

棚田　今日も30人以上、最終的には40人から50人が集まって、声をあげます、だから、本当に申し訳ないんだけど。なんとか……本当になんとか頑張ってください。

金子　少しの間、彼は時の人でした、十一日間に渡り管理局に囚われている人へ「頑張ってください」とうやむやなことを言っていたのですが、うやむや、というのは一般によくいうように十日

と一日をかけて、ゆっくりと、その場に毒を回すので、一二日目にはすっかり、うやむやになってしまったのです。

棚田　だから、本当に申し訳ないんだけど。なんとか……本当になんとか頑張ってください。

賑やかな若者たちの声がピッタリと止む。

静かな時間

金子　だんだん彼の周りの人もいなくなり、ゆっくりと彼は落ち込んで行き、少しの間、話題になった後、人々がそのことを忘れた後も、落ち込み続け、うちに転がり込んで、しばらく、これまでしたことのなかったゲームをしていると思ったら、そのまま、出て行かなくなってしまったのでした。

棚田　（金子へ）別にゲームだけじゃない。

金子　時々、部屋の中の足りない洗剤を足してくれることもある。

棚田　……。

金子　ねえ、もう黙ってんの。

棚田　……黙れっていうから。

金子　言ってないよ。

棚田　言ったよ。一人だよ、俺、

金子　あんたが黙らないから、みんないなくなったんじゃないの？

棚田　違うよ。

金子　じゃあなに？

棚田　機嫌悪いの？

金子　別に。

棚田　言えよ。

金子　もう行く、仕事。

棚田　行くべきじゃないね。

金子　あんたこそ機嫌悪いわけ？

棚田　機嫌直せよ。お前、もういないんだから。

金子　うるさいなあ、電気代払ってくれるわけ？

金子、仕事に行ってしまう。

1人残された棚田。

棚田　お前はさ、もう、いないんだよ、本当だよ、俺がお前の家の窓を閉めなかったせいで。それで、隣の部屋のねえちゃんが飼ってる犬だか、猫だかのせいで、よくわからない理由でいなくなるんだよ。

山本がやってくる。

山本　（棚田へ）火、ある？

棚田　え？　あ、どうぞ。

棚田、胸元からライターを取り出し、山本へ渡す。
山本は、短いタバコに火をつけて、吸い込む。

山本　ふう、うめー……。
棚田　……。
山本　……。
棚田　ここ、俺の家なんだけど。
山本　いや、あの、僕のこと、見えますか？
棚田　うん。いや、え？
山本　ありがとうございます。
棚田　お礼言われても……

静かな時間。

棚田　あ、あれ、あの、俺のことは？
山本　……。
棚田　俺のことは、見えてるわけ？　なあ？

静かな時間が過ぎていく。
誰もがまだこの夜の中にいる。

棚田　なあ。なあってば。

暗転。

【3】日井とジョムと内田

暗い室内。
様々な大きなのカゴが置かれている部屋。
日井の部屋は金子の部屋の隣。
カゴにはどれも継ぎ接ぎの布が被せられていて、
その中に何か入っているのかどうかは確認することができない。
洗面台からは水が流しっぱなしの音、
ジャブジャブという音が聞こえてくる。
水の音に混じって、女の控えめな声が聞こえてくる。

日井　ジョム……ジョム……、ジョム……
日井　ジョム？
日井　チッチッチ……チッチッチ……
日井　トイレ？……。

水の流れる音だけが聞こえている。

日井はしばらく夜のぼんやりとした体のまま、その場に立っていた。

日井、部屋の電気を点ける。

日井　ひっ

日井の事務所で洗面所を使っていたのは、彼女の見たことのない男性（内田）だった。内田は着ているスーツの袖口をぐっしょりと濡らして手を洗っていた。

内田　あ……。

日井　ど、ど……あ……

内田　ああ……すみません、全然、全然、あの、

日井　……（声にならない）

内田　僕、その、自分の、家、全然、あの、すみません、全然、

日井　……（声にならない）

内田　僕、あ、この家、の近くには、その、住んで、いや、通っている、いや、その、いないのでして、あ、でして、双葉中学校、ありまして、その近くに、いえいえいえいえ、違うんです。

内田はようやく息をゆっくりと吸う。

日井が床に寝そべっていることに気がつく。

内田　ああ……すみません、全然、僕、ああ、いえいえいえいえいえいえいえいえ……えいえい？

日井は地面に寝そべったまま起きない。

内田　……大丈夫ですか？

内田、寝そべっている日井に触れる。

日井　あ……

内田　大丈夫ですか……？

日井　（声にならない）……

内田　大丈夫ですか？大丈夫ですか？

日井　あ、あの、

内田　はい

日井　だ、だ、

内田　はい。

日井　大丈夫です。

内田　え。

日井　大丈夫です。

内田　白目、

日井　……。

内田　白目剥いてますけど大丈夫ですか？

日井　大丈夫です。
内田　見えていますか？
日井　……。
内田　僕のこと。
日井　……。
内田　……。
日井　……。
内田　白目ですけど、僕のこと……
日井　大丈夫です。
内田　それは、
日井　大丈夫です。
内田　はい。
日井　……あ、
内田　……じゃあ、見えている、ということで。
日井　あ、あの、
内田　はい。
日井　……（言葉が続かない）
内田　ほ、本当は、
日井　……（言葉が続かない）
内田　僕のことが、見えてないんじゃ。
日井　……。
内田　すみません、少し、

内田は急に目を閉じた。

日井　……。
内田　くらい……
日井　……あの、

内田は、目を瞑ったまま返事をしている。

内田　はい。
日井　ジョムは、
内田　はい。
日井　あの、ジョム……、玄関、からあなたが入ってきたのかどうなのか、知りませんけど……ジョム、あ、このくらいの、黒くて、いましたよね？　黒くて……ジョム、今どこにいるんでしょうか。
内田　はい。
日井　あ、私のことは、別にあれなんですけど、ジョムがいないと困るんです。この部屋はみんなのための部屋なんです。温度も、出ていく匂いも、帰ってくる匂いも変えないように、変えないように過ごせるように、ジョムも、みんなのための部屋なんです。いましたよね？黒くて、これくらいの大きさの……黒くて……
内田　はい。

日井　困るんです……。

日井、エプロンのポケットから携帯電話を取り出す。
番号をゆっくりとプッシュする。

日井　……

内田、日井の携帯電話を打つ手を掴む。

日井　ひ、
内田　あ、あの、
日井　……
内田　大丈夫です。
日井　え？
内田　大丈夫ですから、僕。
日井　いえ、
内田　救急車には及びません。
日井　はい？
内田　及びません。
日井　ええ。はい？
内田　あの……
日井　手を、その、

内田、日井の手を掴んで離さないまま話を続けている。

内田　僕の顔、どう思います？
日井　え？
内田　僕の顔、
日井　え、え？
内田　（黙っている）
日井　……えーと、か、かっこいい、
内田　そういうことじゃなくて、
日井　眼鏡、
内田　あ！
日井　（驚く）ひ。
内田　続けてください。
日井　え、え、……眼鏡で、

布がかけられているカゴの一つが動いた、気がした。

内田　……。
日井　……。
内田　僕の恋人を知っていますね。
日井　え？
内田　あなたの職場にいるはずです。僕の恋人が。
日井　あの、

内田　彼は今、どうしてるんです？
日井　あの、わかりません……

日井の腕を握る内田の手に力が入る。

日井　う。
内田　どうして分からないんです？
日井　……
内田　あなた方が望むものは全て出したんですよ。在留資格取得申請書、写真、配偶者の戸籍謄本、母国の機関から発行された本人証明書、配偶者の住民税の課税証明書と納税証明書、配偶者の身元保証書、住民票、質問書、質問書、質問書、質問書、質問書、質問書、質問書、結婚に至った経緯、初めて知り合った時期、紹介者の有無について、言語能力……

部屋の中にあるまた別のハコが動いた気がした。

日井　あの、私、本当に分からなくて、
内田　その分からないことが殺しているとは思いませんか、僕は思います。

一つの箱の中から山本が出てくる。

日井　（山本に気がつく）あ。
内田　（日井へ）え？どうなんです？
山本　火、ある？
日井　いや、ありません。
山本　ああ、そう、

山本、別のハコの中に入っていく。
ハコの中から、山本の声が聞こえる。

声（山本）：なあ、火ある？　ライター。

部屋の中にある幾つかのハコは胎動するように動いている。

日井　（内田へ）あ、あの、
内田　教えてください。
日井　私のこと、見えます？
内田　教えてください、そうでなきゃ、僕の恋人はなんだったっていうんです？　何度も管理局の前に行きましたよ、僕は。いつもだれかが、あの前では叫んでいるんです。中で頑張っている人たちに向かって、「頑張ってください」と叫んでいるんです。でも頑張れないんですよ、彼は、だって、もう十分頑張っているから。
日井　お願いします、教えてください。

内田　だから、僕が頑張ることにしたんです。
日井　だからって、どうして私のところにくるの。私は非常勤の職員なんです。
内田　……。
日井　管理局のリノリウムくさい事務室や便所の掃除だってします。あそこでの一番身分が低いのが私なんですよ。
内田　そんなの、
日井　（大きな声）なんですか？
内田　他の人はもういないからですよ。一番最後にあなたのところに来たんです。
日井　それって……

部屋の中のハコは、ガヤガヤと動いている。

内田　ああ！うるさい！

内田、一番大きく動いていたハコの中に入っていく。

声（内田）：うるさいうるさいうるさいよ！

棚田が、洗面所の方から通りかかる。

棚田　（部屋を見渡して）やっぱり、飼ってるよ。
日井　あ……
棚田　たまんないね。

ハコの中から山本が出てくる。

山本　ああ、火がある？
棚田　あるかな？どうだろう。

山本と棚田、別のハコの中に入っていく。
部屋の中にあるどのハコも蠢いている。
一人部屋に残された日井は、二人が入っていったハコにかけられていた布を恐る恐る剥がしてみる。
すると、そのハコの中からは、車椅子に乗った佐々岡部長が現れた。

日井　……部長。
佐々岡　どうしたの？
日井　無事だったんですね。
佐々岡　何言ってるのよ、ジョムは見つかったの？
日井　ああ、そうだ、可愛いジョム……見つかりません。今頃どうしているんでしょう……
佐々岡　大丈夫、大丈夫。
日井　部長。

佐々岡　なあに。
日井　私怖いんです。
佐々岡　（笑っている）ヒッヒッヒ。いつも怖がってばかりでしょ、日井さんは。
日井　笑わないでください、部長。私が本当に怖いものはこれだけなんです。怖い、というのは、心が興奮しているだけで、実は、心底、楽しんでいるということもありますが、その夜だけは違います。
佐々岡　はい。
日井
佐々岡　お家でも犬を飼っていたのね、日井さん。
日井　ええ、ええ、１１匹の犬を飼っておりました。でも、ジョムだけなんです、黒くて、これくらいの大きさの……
佐々岡　そう。そんなにいて、ご近所さんに怒られない？
日井　怒られなんてしません。なんせ、どの犬も吠えませんから。ちっとも犬らしくないのです。彼らの両の頬を掴んで、ぐうっと抓ってやって、「おい、犬ならちったあ吠えてみろよ」と言ってやるのですが、少しも、動かないんです。
佐々岡　（笑っている）ヒッヒッヒ。
日井　あの、
佐々岡　なあに？
日井　……本当に、いるんです、犬。１１匹。
佐々岡　聞いてますよ。
日井　……。
佐々岡　私も１２匹の犬の話を聞いていますが、あなたの話もちゃんと聞きますよ。
日井　……部長、私怖いんです。
佐々岡　うん。
日井　朝が来るから。
佐々岡　うん。

静かな時間

日井　部長……？　すみません……あの。
佐々岡　……。
日井　私のこと、見えますか、
佐々岡　……。
日井　……あの、私のこと、
佐々岡　大丈夫、明けない夜もありますよ、きっと。

舞台は暗い。
いつまでも夜の暗さが終わらない。
車椅子のホイールがゆるゆると動くのが視界に入っている気がする。
水が流れる音がだけが舞台にいつまでも残っている。

おわり